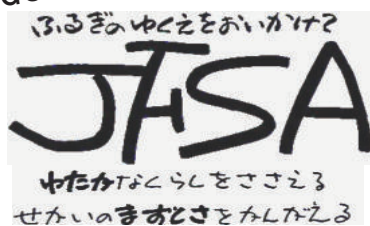


衣のNGO



NPO法人 日本ファイバーリサイクル連帯協議会

千葉市中央区都町3-14-10

TEL/FAX 043-234-1206

E-mail jfsa@f3.dion.ne.jp

URL <https://jfsa.jpn.org>

会報 58 号 2022 年 5 月



給食から見える子どもたちの様子 ～アル・カイルアカデミー本校～ （本誌4～5ページでご紹介）

◆◇JFSA ホームページ
Facebook ページもごらんください◆◇



JFSA HP



JFSA facebook

アル・カイルアカデミー近況報告

海外事業担当事務局 依知川 守

「ブシュラさんへのインタビュー」

前回の会報の表紙では、アル・カイルアカデミーから初めて医科大学へ進学したブシュラさんをご紹介しました。今回は彼女本人に書面でインタビューをさせていただくことができましたので、ここに紹介いたします。

ブシュラさんは、アル・カイルアカデミー本校に隣接するスラム地域で、ご両親と8人の姉妹、1人の兄弟と一緒に暮らしています。

（Q）ご両親や家族は、あなたにとってどのような存在ですか？

（A）両親は、私が子どもの頃から、私には医者になって欲しいと思っていました。そして私がアル・カイルの生徒だったときには、両親はよく私を励ましてくれました。

（Q）あなたは幼稚園クラスからカレッジまでアル・カイルで学びました。その後、大学へ進学を希望することは、あなたにとって自然なことでしたか？

（Q）あなたは現在、医科大学に通っていますが、学生生活はどのようなものですか？何か困っている事がありますか？

（A）アル・カイルで学んでいた頃は、勉強するための設備がすべて整っており、私は進学のために放課後の進学塾へ通う必要はありませんでした。しかし現在は経済的な問題や、インターネット接続の問題を常にかけており、医学生にふさわしい十分な勉強ができる環境とはいえません。

今、私は大学3年生なのですが、医科大学での研究は「運ぶことが困難な重荷」のようであり、まるで車を押して山を登っているような気持ちになることもあります。しかし身の周りの人が亡くなっていくのを見ると、私は無知のままにいるわけにはいかないと感じます。

（Q）将来は具体的にどのような医師になりたいですか？

（A）患者さんの傷を癒し、痛みを和らげることにこそが私は喜びを感じます。

医科学位を取得後は、私は特別研究員の道へ進みたいと考えています。そして将来、私は神経内科医になりたいです。いや必ずなります。インシャラー（神がお望みであれば）。



左から、ブシュラさん
お母さん
妹・マフヌールさん（アル・カイル本校先生）
姉・コマルさん（アル・カイル第3分校先生）

（A）はい、自然なことでした。私はいつも自分の目的のために大学に行きたいと思っていました。また私は学ぶことについて神様から資質を与えられていたのだとも思います。

成長するにつれて、私は自ら最善を尽くすようになり、そして自分の目標を追い始めました。しかし、もし私がアル・カイルに通っていないならば、そのような目標を持つことはできなかったでしょう。ムザヒル校長は私の進む道を整えてくれました。

（Q）実際に大学へ進学を志す中で、困難なことはありましたか？

（A）私は自分の目標へ情熱を持っていたので、あらゆる困難な状況に直面しました。私の家族が住む地域は、非常に停電の時間が長い（※）、以前はロウソクの灯で勉強していました。またインターネットが繋がらないという問題もあります。私は9人兄弟のため、家には落ち着いて勉強できるような場所もありませんでした。（※本校のあるスラム地域は、電力供給が整備されておらず、数時間おきに停電があり、1日のうち電気が使えるのはトータルすると半日ほど）

そして今この段階になり私は気づき

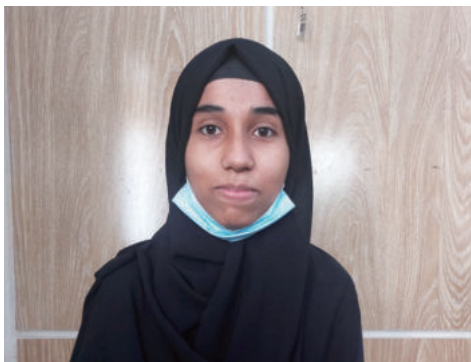
ました。それは私は子ども時代にただ一所懸命に勉強するのではなく、効率よく勉強するべきだったということです。しかし両親は教育を受けていませんでしたし、当時は私を導いてくれる人は誰もいませんでした。

（Q）あなたは大学への進学に際して、自分が最も望む道へ進むことを選んだと聞きました。どのような経緯だったのですか？

（A）私には他に幾つもの選択肢がありました。私は既に薬学、理学療法、食品科学、そして歯科などの学校の入学試験にも合格していたのです。しかし、私の第一優先は医学の学士を取得して医師になることでした。そのため、私はそれ以外の分野は選びませんでした。

初めての試験では医科大学に入学できませんでしたが、それでも私は強い意志を失いませんでした。私は再び立ち上がり、2回目の試験に挑みましたが、私は私立のハムダルド医科大学に入学することができました。

（Q）そのように医科大学進学への情熱



ナルミンさん カレッジ2年

Assalam O Alaikum. Firstly, I would like to introduce my self. My name is Nalmin Zaidi. Currently, I am studying in Second year from Al-Khais College. From Nursery to college, I have studied from Al-Khais School and college. This institute is like a home for me. I want to study further after completing college to polish my skills and abilities. My father is Air conditioning mechanic. My parents have always supported me to study further. I will work hard and try to get in good university to follow my dreams and make my parents happy and proud.

●ブシュラさんに続く後輩たち

アメリカで暮らすパキスタン人医師が作ったNGO「APPNA」は、パキスタンの生活困窮家庭の学生たちに奨学金を提供しています。ムザヒル校長の古くからの友人も参加しています。今年はアル・カイルカレッジの50人の学生が奨学金を申請し、全員が奨学金を得ました。学生達は、APPNAのオンライン面接を受ける前に全員が自己紹介の文章を提出しました。以下の文章は、カレッジ2年のナルミンさんが書いた自己紹介文です。

アッサラーム・アライクム（あなたがたの上に平安がありますように）
まず、自己紹介をさせていただきます。私の名前はナルミン・ザイディです。
現在、アル・カイルカレッジの2年生で勉強しています。保育園からカレッジまで、私はアル・カイルで学びました。この学校は私にとって家のようなものです。私はカレッジを卒業した後、自分の技術と能力を磨くためにさらに勉強したいと思っています。
私の父はエアコンの整備士です。私の両親はいつも私の勉強をサポートしてくれました。
私は夢を追うために、そして両親を幸せにして私を誇りに感じてもらえるように、一所懸命勉強して良い大学への進学を希望しています。



本校に隣接するスラム地域で暮らす人々

を持ち続けることができた理由は何ですか？

（A）私の両親や先生は、私の目標に向けて動機付けしてくれました。また病院に通っていた時には、医師達からも感化されました。

私は人々を助けるために働きたいと考えています。そして医療こそが人類に奉仕する職業だと考えています。だから私は自分の進む分野を変えたくはなかったのです。

給食から見える子どもたちの様子

アル・カイルアカデミー本校では、家庭の事情があつて家で昼食をとることができない子どもたちのために、給食を提供しています。

※アル・カイルアカデミーの本校には教師や事務員以外に11人の調理、清掃、などを行なうスタッフがいます。その中の4名は本校の給食室で働いています。

今回は、アル・カイルアカデミーが給食を始めた時から仕事を続けてい

るローシャンさんにお話を聴きました。

【ローシャンさんへのインタビュー】
(Q)あなたの出身はどこですか？あなたは子どもの時、学校へは行けましたか？

(A)私はインドのデリー出身です。私の家は家計が厳しかったので、子どもの頃は学校に行きませんでした。

(Q)ご家族について、教えてください。

(A)私には4人の娘と1人の息子の合計5人の子どもがいます。40年前、最初の子どもが12歳のときに夫が亡くなりました。私の娘のうち2人は亡くなり、他の2人は結婚しています。私の息子は結婚し2人の娘がいますが、嫁

は亡くなっています。息子は青果商を営んでいましたが、現在は仕事をしていません。

(Q)あなたの子どもたちもアル・カイルの生徒でしたか？

(A)いいえ、私の子どもは誰も学校で勉強しませんでした。私の2人の孫娘はアル・カイルアカデミーで勉強しました。

(Q)あなたが学校で働くことになったきっかけは何ですか？

(A)夫の死後、私は仕事をすることを決め、(ムザヒル校長が学校を開校した)1987年に働き始めました。私は今80〜85歳位ですが、今でも調理の補助として仕事を続けています。

(Q)学校での仕事以外に、何か仕事をしていますか？

(A)いいえ、アル・カイルで仕事を始めてから他の仕事はしていません。

(Q)そもそもアル・カイルが給食の提供を始めた理由を教えてください。

(A)私が仕事を始めた頃から学校に来る生徒は、家で昼食をとる余裕がない子ども達でした。そこで、アル・カイルは、学校でそのような生徒のために食事を用意することにしました。

(Q)あなたにとって、家で食事を作るのと学校で食事を作るのはどのように違いますか？

(A)家での料理は学校に比べて簡単です。私の家では4人(私、息子、2人の孫娘)のためだけの食事を作っています。しかし学校の調理場では、この本校だけでも毎日100人分の食事を用意しているのです。

(Q)生徒に一番人気のあるメニューは何ですか？

(A)ビーフカレーとビリヤニ(炊き込みご飯)が生徒に人気です。



給食の時間の様子
彼女たちが食べているのが人気のビリヤニ



ローシャンさん
生徒たちからは、親しみをこめて『ブア』(おばちゃん)と呼ばれている



新しくなった調理場

◆給食について生徒へインタビュー

ノシュイーン・ファルカンさん
(4年A組)



(Q)あなたはアル・カイルで給食を食べていると聞きました。家に帰っても両親が昼食を用意するのが難しいということでしょうか？
(A)はい。私は学校で給食を食べています。母は家政婦として働いていて、父は服地の印刷工場で働いているのです。
(Q)給食はどのように食べますか？友達と一緒にですか？
(A)私は友達のフリヤと妹のアムナと一緒に給食を食べています。
(Q)給食では何が美味しいですか？
(A)私はビリヤニ(炊き込みご飯)が大好きです！

(Q)あなたは給食をどのように感じていますか？
(A)私は家よりも学校で昼食を食べる方が楽しいです。ここの給食は美味しいんです！
(Q)給食室で食事を作っている女性を見たことはありますか？どんな人たちですか？
(A)はい、私は給食室で料理をしている女性たちを見たことがあります。でも名前にはわかりません。彼女たちはとてもおいしい料理を作ります。

★スラム地域で暮らす人々の普段の食事は…

朝：プラタパイ生地のようなサクサクした薄いパン)、チャイ(ミルクティー)
昼：前日の夜の残りもの、ローティー(ナンのようなもの)
夜：野菜カレーや豆カレー、ローティー

*肉は野菜や豆と比べて高価なので、肉料理は月に2回程度
普段は牛肉や鶏肉が多く、お祝いや特別な時などには羊肉を食べる



パキスタンへのコンテナ送り出し・到着報告

第76回コンテナ送り出し

1月27日 ●積み込み重量：24トン710KG
⇒3月20日カラチにて荷下ろし



第77回コンテナ送り出し

3月24日 ●積み込み重量：24トン661KG
⇒現在カラチに向けて航行中



第77回コンテナ送り出しの様子
(JFSA千葉センターにて)



40フィートコンテナ
外寸 長さ 12.2m
幅 2.4m
高さ 2.9m

※「ハイキューブ」と呼ばれる高さの高い規格のコンテナを利用しています

【コンテナの手配と出港まで】

今回はJFSAがAKBG(アル・カイール事業部)に古着を送るために使う「コンテナ」について、その出港までの一連のながれをご紹介します。

①コンテナ送り出し日を決める

年間5回の送り出しを行なう計画に沿って、AKBGと相談して送り出し日を決めます。約2ヶ月半に1度行うペースです。日程に合わせて、輸出用に圧縮・梱包した古着等のベールを25トン程準備します。貿易用語でコンテナ積み込みのことを「**バン詰め**」と言います。

②コンテナの予約

送り出し日が決まったら、コンテナの手配をします。コンテナ船の発着スケジュールと運賃は1カ月ごとに船会社から発表されます。コンテナを載せるための予約は船会社と輸出者の間で国際物流の手配をする「**フォワーダー**」と呼ばれる業者に依頼します。「**フォワーダー**」は輸出者から予約を集めて船会社とまとめた数の契約をするので、JFSAが直接船会社と契約するよりも運賃が下がります。

③コンテナの輸送(ドレー)と通関業務の依頼

空のコンテナをJFSAまで輸送し、積み込んだコンテナを横浜港に搬入する陸上輸送のことを**ドレー**と言います。**ドレー**の手配と税関申告に必要な通関手続きは「**乙仲(おつなか)**」と呼ばれる海運貨物取扱業者に依頼します。**バン詰め**後に**乙仲**に通関書類を送り、税関で無事に輸出許可が下りれば、横浜港からパキスタン・カラチ港に向けて出港となります。

乙仲は、輸出のいろはも分らなかった、JFSAの立ち上げの頃から20年以上お世話になっている業者さんで、**バン詰め**にボランティア参加頂いたこともあります。**フォワーダー**はアジア、中東向けの輸出に強い業者さんです。昨年から、コロナ禍・国際市場の変化・原油高などの影響を受けて、厳しい海上輸送環境が続いていますが、情報提供やコンテナの予約確保などで力になっていただきとても心強いです。
(国内事業担当事務局 入江賢治)



第30回送り出し(2009年6月)



カラチに到着した76回コンテナ 荷下ろしの様子

kar-khana (カルハナ) 事業



BOSと呼ぶな

パキスタンの縫製工房に、商品の依頼や出荷の指示などをすると、主にメールのやり取りをしているアーディル氏は必ず

「OK BOSS」

と返信をしてくれます。呼ばれ慣れていない私にとってはとてもむずがゆく、あくまでパートナーとして付き合っていたいので、ボスと呼ばれることにはいまだに慣れません。一度、ボスと呼ばないで下さいと伝えましたが、それでも彼は毎回「ボス、了解です」と返事をくれます。きつとそれはアーディル氏の誠意であって、これ以上やめてくれということ、無粋なことだなどと思い、私も受け入れるようにしました。

英語でのコミュニケーションも、半年前に比べるとだいぶスムーズになってきました。当初は、作業システムや技術面で指摘する際は、オペレーターに包むように伝えていました。

例えば

「This is a pen(これはペンです)」

と伝えればよいものを

「This is a writing tool on paper

(これは紙に書く道具です)」
というような表現をしていました。

いわゆる日本的な表現、回りくどい伝え方をする癖が知らず知らずのうちに身につけてしまっていたのです。ビジネスシーン、特に英語でコミュニケーションをとる場面において、これでは伝えたいことがばやけてしまい、かえって相手を混乱させてしまうのです。それに気づいてからは、端的にはっきりと意思表示をするように心がけました。それからしばらくすると、冒頭で書いたような返事がくるようになりました。

先日、縫製をしてもらっているリズワナさんの娘さんが結婚するから、みんなでお金を出し合ってお祝いをするんだと彼が話してくれました。

言語が違えば文化も異なる。コロナ禍で派遣のめども立たず、直接会ったコミュニケーションも今は難しい状況です。けれども、おめでたい報告に同じように私も喜びを感じました。

作った商品をお客様が気に入ってくれば同じように喜び、あまり良い出来ではなかったときはともに悩

み、結果が出なければともに落胆する。わたしたちは結果や感情を共有するパートナーなのです。

織生地、刺繍やシヤルワールなど、彼らのアイデンティティでもある技術や文化を取り入れながら、少しずつ「Kar-khana」という事業が広がっていくように、今後も活動していきたいと思っています。



アーディルさん
パキスタンの伝統的な刺繍を施したカルハナの新商品の試着中



リズワナさん
シャツを作成中



kar-khana

kar-khana(カルハナ)事業担当事務局 佐々木 貴弘